

伯利西爾時報

NOTICIAS DO BRAZIL
Publicado semanalmente
Rua Conselheiro Furtado
No. 89
Caixa Postal H
S. Paulo, Brazil
Proprietario e editor
Seisaku Kuroishi
Assignaturas
por Anno 10\$000
Semestre 5\$500
Mez 1\$000
Semana \$800

眞の成功を握れ

「成功」とは一事業を仕遂ると云ふ
儀で、昔は一と廉の事業を立派に
成就した者でない、成功者とは云
はなかつたものだが、近來は歐洲大
戰の不振で大分成功が出來たり、世
に阿る新聞、雑誌が「成功者」を
成功し、と挑発的に書き立てる處より
成功し、と挑発的に書き立てる處より
成功し、と挑発的に書き立てる處より

伯利西爾に於ける
日本商品の現況

長 尾 喜 樹

成る程金を儲けに行くと云ひ、金
を蓄めて歸つた云ふことは、誠に
結構なことには相違ないが、唯だ僅
かなことを以て成功と云ひ、又成功
其の物は金であるとするは甚だ當
得たものでないと思ふ、何となれば
儉樸な輕薄な觀念を一度青年の頭
腦に打込むに於ては、「成功」即ち
「金」の爲めには手段を選ばずと云ふ
ことにもなり、又は僅少な金を儲け
是れ成功なりとして、小成に安する
の弊を醸成するからである。

云ふ奇現象を呈したので、爰に識者
は重金主義即ち取込主義の誤れるを
に手を下すの緊切なるを忘れてはな
き、遂に自由貿易主義に變へて今
日に至つたのであるが、是と同じく
個人の財政に於ても取込主義必ずし
も成功を意味するものではない。
成功とはどうして眞面目に一事
業を仕遂ると云ふことで、而して金
は此の事業を爲すの資本でなければ
ならぬ、故に苟も成功を望む者は先
づ出發の一步に「吾は何を爲すか」を
定め、次に之を如何なる方法に依つ
て「經營するか」を考慮し、以て資本
の活用を爲さねばならぬのである。
尤も事業の經營には成否難し、起
伏興作成功の容易に決し難きものも
少なくはないが、其處は事業の面も
結構なことには相違ないが、唯だ僅
かなことを以て成功と云ひ、又成功
其の物は金であるとするは甚だ當
得たものでないと思ふ、何となれば
儉樸な輕薄な觀念を一度青年の頭
腦に打込むに於ては、「成功」即ち
「金」の爲めには手段を選ばずと云ふ
ことにもなり、又は僅少な金を儲け
是れ成功なりとして、小成に安する
の弊を醸成するからである。

料及び紙ナプキンを主とし、絹、藥料
藥劑、洋傘骨及び其他雜貨である。
然れども、其の種類の何たるを不問願
る歡迎されてゐる。之れ全く戦争の
資である。輸送に便するに便するに
日本商品を伯利西爾に輸入するには
佛國マルセイユ港、又は伊太利ゼノ
ブア港を経由するを必要とせば、如
何に好況を演じつゝある日本商品は
いへば、航海の危険、運賃の狂騰、保
險料の高率を勿論、之れを輸送する
歐洲の船舶悉無の姿なる現今に於て
は、到底今日の大販路を求め得ざる
べく、火を視て水なきの類に屬せし
ならんも、幸ひに大阪商船株式會社
は機に投じて日伯間定期航路を開
始せしを以て、頗る安全に多大の商
品を日本より直接輸入するを得て、
急速にこの盛況を致したるのである。
又カイゼルが決定せし今時の大攻撃
は即ち平和を意味するものにあらず
るか、聯合軍が必死の防禦幸にして
能く獨逸軍を驅逐し得ば、戦争は更
らに永續すべくも平和は必ずしも來
る時期の問題である。一度平和克復
せば伯利西爾に於ける日本商品は、
歐米商品の爲めに一大打撃を蒙る
は火を賭すより明なる事である。さ
るに伯利西爾に於ける日本商人は、
此際大に覺醒し大に覺悟して來るべ
き歐米商品の大販路に備ふる必要が
あると思ふ。先づ第一に探るべきは
「買つてやる主義」を止めて、「賣つて
貰ふ主義」となし、商品の品質を吟
味し、愛玩的贅物の如く外人より
看做れたる傾向を打破し、陶器と云
はず雜貨と云はず今少しく實用向と
なし、又價格に於ても暴利を捨て、
今少しく眞面目なる商法に則り、販
路を擴張し、確實なる顧客を得るに
勵むるが目下の急務であると思ふ。
猶陶器或は玩具を只一の商品として
之れが販賣に致つたる様子定規を改
め、廣く我國の商品を此國に照會し
更に所謂商團なる通弊を廢し、惡
競争を止め、暗闘を捨て商業組合を
設けて相互の利益を計り、小賣の商
業者を助け、共に共に活動し以て確
實なる勝利を贏ち得るに務むるが肝
要であると思ふ。

田舎旅

カンペーナス 渡邊 孝
サンパウロを喰ひ詰めて旅に出た
されど必ずしも田舎を喰ひ詰めて
の景見ではない、定まつたプログラ
ムのない旅、何時何處へ行かなけれ
ばならぬといふことはない、呑気に
ブラ／＼歩いてゐる内に田舎の先覺
者實際家諸君から伯國農業の一般
も教つて貰へばそれで結構である。
サン、カールで支線に乗り換へ
る、祭日のこと、寺詣り客で車内
いつになく賑ふ、善男善女ばかりで
ない、一隅に陣取つた異人様一團、
ビンガの喇叭を始めて氣焔を上
げて居る處に切符取りに來た車掌殿
かねて知合と見て、差出された四
合瓶の口を鼻先にあて、臭を嗅ぎ
た光景は皆一時に笑ひ出した、此車
掌余程の酒好きと見ゆる。
車内に一日本青年が居た、立派な
厚外套を着てさう夏のことだらう、
聖市から來たら下りする青年がア
グアベルメリヤ驛で下車すると今迄
の向側にいた西國人が傍にいた伯
國人相手に大に日本移民を賛揚し初
めた。

森のかけより
静かなる森の朝風ひたたくと清水の
流れひたすか如し
さやかなる黄泉のひびき思はする森
のうめきじゆつと聞き居る
屈託の長き欠伸の折り／＼に散る
も見ゆる落葉なるかな

械機の音を聞き
(一六) 翁 長 助 成
譯詩のり(パンス作)
一偉大なる神の御力
人の子の知るゆりす
さはれ知るこの世をすぶる
底しれぬみこころを

第七信

日本村に遊ぶ

アラ、クワラ線の終點リオ、ブレト市で一夜を明かした私は其翌朝五時の一番列車でイナシラ、ウシヨール驛へ引き歸した。此頃の午前五時...

二基米突をやりイビラを通過し此附近を走るべしとの事なるが昨年未鐵材不足の爲め一時中止の形となる...

問 四週前より右背部に痛みを覺へ二週前等閉に付し夫れより非常に激烈の痛みを感じ申候に付直に耕...

問 私事四年前肋膜炎に罹り僅かの日数で治りましたが、其後今日に至る迄随分疲労を致しましたが再發した事がありませぬ、然し再發恐怖の念が私の頭より去る事は出来ませぬ...

日本金兩替 古本買入並に御不用品買入可申候 新荷着 尋常小學校書壹年級より六年迄...

カマラダ募集 朝陽 聖市コング街六九 西原農園 申込所 西原清東...

寄書

イグアペ地方巡遊記

後輪蒸氣船にて

二月五日、揚子江を排せば夜來の雨霽れ、川霧立ちこめて遠望を許さず、七時、私共は豫て用意の「ジュキヤ」號に客となり、同名の河の面、兩岸の風光を甲板に賞しつゝ、下るのであつた。

二十世紀の今日、外輪船は隔田川の一錢蒸氣(今は無論値上したらうが)のみだと思ふ人あらば、それは大なる誤りである、伯國は一面南歐の文明を移して、偉らかつてある半面に、都市を離れた田舎に入ると新を燃料の後輪蒸氣が、沿岸の牛の唸に調子を合せて、緩かに走つてゐるが、是は伯國の面白い處で、此の矛盾があるから、私共の發展に此の地が有望だと云ひ得るのである。

正午過ぎ船はリベira河の本流に出で、ジュキヤ、デ、バラに到着した、此處は私共の乗つてゐる小蒸氣と、リベira河本流の方から來る大蒸氣との乗替へ場であるが、動もする大蒸氣が運る、ので一泊の憂目をみねばならぬことがある、こゝで私は一生の智慧を絞つて、僅か二時間で行ける「レヂストロ植民地」まで直行すべきを、船長にまで談判した所が船長の答が面白い、「うん、なことをするなら、社命違反で明日から飯の喰ひ揚げ、イグアペに残せる妻子までが餓死にならざるを得ない、君少しは察し給へ」と辛直に切り出されたには、私も談判敗した形で、ソーンと返辭に詰つたのである。

併し極まれは變ず、一生の智慧を絞つた私が指を叩いて引き下ると間もなく、一隻の「ランシャ」が勢いよく走つて來るのを見た、直ちに白鳥さんの雙眼鏡を以て熟視すればこは喜ぶべし、T、Kの旗を掲げた、伯刺西爾拓殖會社の小蒸氣であつた、艦が岸に着いた、中かいて益々好感を加へたのである。

藤田、石川の兩勇士が飛出して、迎に來ましたよ、挨拶もうこう

ここに、先づ植民中の婦女子を「ランシャ」に移して、第一回のレヂストロ運搬に取掛ることになつた。

白鳥さんと私は第一回の群に加つた、リベira河は開きしに勝る大河で、幅は二百五十米突から三百米突もある上に、雨後のこと、濁流激し、滔々流る、水濁に乗つて疾走したのは、實に近頃の快事であつた、斯くして四十分も走ると愈々伯國會社の所有地「ボアビスタ」に來た、此地は木高く生い茂つて満目翠の岡、河邊を牛の群が追ふあたりは、んびりとした植民的氣分が充ちてゐた。

(五)「レヂストロ」上陸
羊鷹の様に曲がり曲がった河を流る石川船長の馴れた操縦で巧みに淺瀬を避けて、レヂストロに着いたのが、午後三時半頃であつた、合示の汽笛で出迎人が何所から來るか黒山の様に集つた、其れに子供が叫ぶ、犬が吠る、豚が走る、山羊が駈る一時は却々な雑踏であつた、一同上陸すると舊い人と新しい人の挨拶が交はされ、國からの言傳やら、航海の安否やら互に語り合ひ、ランシャは第二回目の運搬の任を果たすべく出て行つた。

私が上陸すると麥莖帽姿の一紳士に握手を求められたので、能く見れば知友馬場留四郎君であつた、見逸たのも無理はない、着伯後四年振りから、いになつて口髭なんか蓄へてゐるから、次で福井、野村、高野、永島の諸兄からも出迎を受けた、中には二三の新顔もあつたが、多くは昔馴染で、何だか自分の郷里にでも歸つて來た様で嬉しい氣分に満ちた。

「レヂストロ植民地」の土を踏んだ第一歩は私に取つて好感である、故に見る物聞く物皆好感ならざるを得んや、すつかりレヂストロ信者青柳大人の置き土産とも云ふべき前地新夫婦の、料理上手な御馳走を頂いて益々好感を加へたのである。

二回目のランシャは七時に着いた、待ちに待つた第一回の女子供は、之を棧橋に出迎へ無事の着植を互に喜び合つて涙を流して居たのも少なくない様であつた、それから植民一同は福井、馬場兩兄の肝煎に係る、握飯と梅子の馳走に舌鼓を打ち、二階建ての廣く、とした植民收容所に安き眠りについたのである。



千年萬年 (上) 巖谷小波

東むいた海邊に、松が澤山生へて居ました、その中にまた一本、大きな松の木がありました、これが、千年前から生へて居る、ため度い松だと云ふので、何時の頃からか、幹には、太い注連繩が張つてあり、また、その下には小さな宮が出来て居て、時々た供物が置いてありましたが、其所には何が祀つてあるのでもしやう。

近所に、兄の子が居りました、兄は千代吉と云ひ、妹はたねと云ひましたが、至つて仲好しで時々この松原へ落葉を掻きに來ますのに、いつも二人は連れ立つて互いに助けあつて居りました。

ある日の事です、丁度暴風の吹いた朝の事でしたが二人は籠を負つて熊手を持つて、また落葉掻きに來ました、かう云ふ時にはよく松葉が取れるからです、自分達より先に、足の長い白い物が松の木の下で砂原で、頭を長くして何か探して居る様で、すから側へ行つてよく見ましたら、それは一羽の鶴でした。

二人は不思議がつて、しばらく松の蔭で見つて居ますと、鶴はうれしくも知らず、時々長い頸をまげて考へては又しきりに探して居るのがよくよく大切な物を探して居る様です。「兄さん、何うしたんでせう?」「たねは小聲で聞きますよ」「お待ちよ、私が一つ聞いて見るから」千代吉は一人出て行つて、「鶴ちゃん、前には先刻から何を探して居るの?」「私、驚いて飛び退きません、私の所の大切な卵を、昨夜の暴風で落されたから、それで探して居るんです。」「ア、卵が失つたの?」「エ、然うです、今日あたりはもう孵へさうと思つて折角楽しみにして居たのに何しろあの風ですもの、巢ごと吹き落されてしまつたんです、巢は又出来るからようございませぬが、卵は惜しくもたまりませぬ。」「眼から涙をこぼして居ります。」「千代吉は氣の毒がつて、一羽はほんごに心配だらう、ぢやア私達も手つたつて一所に探してあげやうよ、オイ、鶴ちゃんもた出で、云つてますよ、おれも聞いて居るものですよ。」「おれちやア一所に探しましやうよ、ほんごに氣の毒だらうね。」と、これから二人とも熊手でもつて、落葉を掻いたり、砂を掘つたりして方々探しましたが、砂も、何うしたのか見付かりませぬ。」「ほんごに何所へ行つたらだらう?」「誰かもう拾つちやつたらんではやうか。」「二人は熊手を杖にして心配さうに、顔を見合せます。」「いゝよ、私はもう夜の明けた時から、かうやつて探して居るのに、お前さん達の來るまでは誰もまだ見ませんから拾はれる氣づかひはありません。」「おれちや遠くへ吹き飛んちまつたのか知らぬ。」「事によつたらさうかも知れないね。」「さうよ、屹度波に取られちまつたのよ。」「どたねは海の方を見渡しましたが、其方は只波ばかりで、少しもそれらしい物が見えませぬ。」「千代吉はまた考へました。」「お待ちよ、丁度此所に神様がある神様は始終此所に居らして夜でもよく見て居らつしやるから、御存じの無い筈はあるまい、一つ伺つて見やうぢやないか。」

と言ふ動詞なるに拘はらず斯様に形を異にするは何故であるかと言へば主格の人稱は又数が違ふからである。即ち：動詞は動作或は有様の實現せらるる時及方法により形を異にするのみならず、又主格の數並に人稱に應じて形を變ずる語である。或る動作には必ず其の當事者即ち主格が有る可きものにして若し無き時は何物に屬する動作なるや分らず到底意味を成さず。故に：如何なる短文 (sentença) にも主格及動詞を要すと言はねばならぬ。乍然動詞の形又は前後の關係により主格は何物なるや明かなる時は主格を略すことが出来る。例へば私は彼を好むと言ふ文句は Eu gosto d'elle. と言ふべきが規則的なれども gosto と言ふ語は夫れ自身已に (私が好む) と言ふ語なれば單に Gosto d'elle. とするも意味明なれば eu を略すことを得。動詞の意味を補足し或は形容する語を補充語と謂ふ。例へば上に挙げたる短文の japonês, soldado, rico, laranja, d'elle の如し。

動詞の語態
或る一つの動詞も動作と主格の關係により次の三通りの態 (かたち) に現はされる。即ち主格が動作を演ずる場合 (能動法)
例 Elle levantou a pedra. (彼は石を起した)
主格が動作を受くる場合 (受動法)
例 A pedra foi levantada por elle. (石は彼によりて起された)
主格が動作を演じ同時に此を受くる場合 (兩動法)
例 Elle levantou-se. (彼は自分を起した即ち起きた)

Medico (Continuação)
Doente. Parece que tenho alguma coisa inchada, em baixo da costela esquerda.
(病人) 左の肋骨の下の所が何か腫れてるものがある様です
Medico. Sim, meu caro, porque está sofrendo do baço.
(醫師) ろうです。脾臓が悪いからです
D. O que tem isso com a maleita?
マレータと如何言ふ關係がありますか
M. A inchação do baço é o resultado da maleita que o atacou e fez inflamar.
脾臓の腫はそれを犯して炎症せしめたマレータの結果です
D. O doutor acha que a molestia é grave?
貴方は病氣は重いと御考へですか?
M. Não; mas é preciso cortar a febre, quanto antes.
いゝね。ですが一時も早く熱を取らねばなりません
M. Deixe ver a lingua.
エスター ベン スージャ テン オアラード
Está bem suja. Tem obrado?
舌を見せなさい。大變汚い。大便の通がありますか
D. Não, senhor; já faz quatro dias que não tenho a evacuação.
いゝねありません。便通の無いのか此で四日になります
M. Vamos ver a temperatura. Ponha o termómetro

